

大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因

木 村 典 子
石 川 幸 生
青 木 葵

愛知東邦大学

大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因

木村典子
石川幸生
青木葵

目次

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究方法
 - (1) 調査対象
 - (2) 調査方法
 - (3) 質問項目
 - (4) 認知症高齢者のイメージ
 - (5) 統計処理
 - (6) 調査期間
 - (7) 倫理的配慮
4. 結果
 - (1) 属性
 - (2) 祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心
 - (3) 認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、認知症高齢者と接することの不安
 - (4) 認知症高齢者のイメージ
 - (5) 認知症イメージの4因子と祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心、認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、認知症高齢者になることの不安の関連
 - (6) 自由記述「認知症高齢者に接した場合の対応」についてテキストマイニング分析
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

認知症高齢者の地域生活の支援のためには、保健・医療・福祉のサービスと地域住民の参画による包括的な展開が必要となる。世代を超えた人々が認知症高齢者への理解が必要である。従来、高齢者イメージに関する研究は主に、高齢者全般について、児童、中学生、大学生におこなわれてきた。高齢者に対して大学生は否定的なイメージをもっていた。高齢者イメージの形成は、高齢者との接触、親の祖父母への態度が影響していた¹⁾。大村らは高齢者イメージの現実と理想のズレが高齢者施設での虐待につながっていた²⁾。桂らの看護学生におこなった認知症高齢者のイメージの研究では因子とし、尊厳性、俊敏性、緻密性、活力性の4つが導き出され、各要素にお

いて、負のイメージをもっていた。しかし、学年が進むにつれて、授業や実習で、肯定感が高まっていた³⁾。吉川らの介護職員、介護福祉士課程の学生におこなった認知症高齢者イメージでも、同様の負のイメージの傾向となった。また、介護経験の無い者が低い結果となっていた⁴⁾。いずれにおいても、特定の対象者での調査であった。木村らは地域住民の参画意識について、身近に認知症高齢者がいた場合の対応と認知症についての知識、不安の関係を分析した。地域住民は認知症高齢者に対して、多くの者は支援しなくてはいけないと考えていた。しかし、認知症高齢者にもできることがあり、それをサポートするという考えは少なかった。また、支援しなくてはいけないとは感じているが、何をしたらよいか分からない状況にあることもわかった⁵⁾。昨今、高齢化にともない、認知症高齢者が漸進的に増加してきている。認知症高齢者が尊厳を保ちながら、穏やかに、家族も安心してすごすことができる社会をつくるには、認知症の正しい知識を普及させていくことが必要となる。今回は認知症高齢者への理解をすすめるための、教育方法の資料を得るために、大学生の認知症高齢者へのイメージとその関連要因について研究することを目的とした。

2. 研究目的

大学生の認知症高齢者へのイメージとその関連要因について調査し、認知症高齢者への理解を進めるための、教育方法の資料を得る。

3. 研究方法

(1) 調査対象

大学で高齢者関連の科目を受講する学生を対象に、認知症高齢者に関する質問紙調査を実施した。調査対象は1～4年生 248人。

(2) 調査方法

高齢者関連の講義終了後、研究目的を説明し、一斉に無記名式質問紙を記入してもらった。回収はその場で回収するか、もしくは既設した回収ボックスにて、回収した。質問紙の提出をもって、同意の得られたものとした。

(3) 質問項目

年齢、性別、学年、高齢者との接触状況、祖父母との同居の有無、高齢者との接触状況、認知症の情報源、認知症高齢者と接触した機会の有無、高齢者への関心、認知症高齢者のイメージ。認知症高齢者に接した場合の対応と認知症について思うことを自由記述にした。

(4) 認知症高齢者のイメージ

中野らのSD法における老人イメージスケール⁶⁾を適用した。これは17形容詞対からなり、否

定的な極から肯定的極へ順に1点から5点が配置され、3点が中立点となる。表1に示した。

表1 中野らの老人イメージスケール

	1	2	3	4	5	
ひどい	・	・	・	・	・	すばらしい
醜い	・	・	・	・	・	美しい
きたない	・	・	・	・	・	きれい
愚かな	・	・	・	・	・	賢い
悪い	・	・	・	・	・	良い
だらしない	・	・	・	・	・	きちんとした
正しくない	・	・	・	・	・	正しい
遅い	・	・	・	・	・	速い
鈍い	・	・	・	・	・	鋭い
暇そう	・	・	・	・	・	忙しそう
小さい	・	・	・	・	・	大きい
邪魔をする	・	・	・	・	・	手伝ってくれる
話にくい	・	・	・	・	・	話しやすい
冷たい	・	・	・	・	・	暖かい
悲しい	・	・	・	・	・	嬉しい
病気がちな	・	・	・	・	・	元気な
弱い	・	・	・	・	・	強い
	1	2	3	4	5	

(5) 統計処理

認知症のイメージは各形容詞対の平均値を算出した。また、因子分析を行い、因子を抽出し命名した。さらに、認知症高齢者のイメージと関連要因を検討するため、群間の平均値のt検定を統計用ソフトPASW18にておこなった。

自由記述である認知症高齢者に接した場合の対応と認知症について思うことは統計用ソフトText Mining Studioにて、「祖父母との同居の有無」と「認知症高齢者との接触の有無」で、頻出語、話題分析をした。

(6) 調査期間

平成24年10月～11月

(7) 倫理的配慮

対象者へ質問紙を配布する際、調査の目的と主旨を説明した後に調査は無記名であることに加えてデータ全体をコンピューター処理するため、個人が特定されることは決してないこと、研究

協力は自由意志によるもので断っても不利益を被らないこと、質問紙の提出をもって調査に同意が得られたものと解釈することを依頼文に添えて説明し、調査を実施した。

4. 結果

(1) 属性

対象者の属性は表2に示すとおりである。平均年齢は 19.7 ± 2.0 歳であり、性別は男性60人、女性178人であった。1年生92人、2年生115人、3年生18人、4年生13人であった。

表2 対象者の属性

項目	人数
平均年齢	19.7±2.0歳
性別	男性 60 女性 178
学年	1年 92 2年 115 3年 18 4年 13

(2) 祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心

祖父母との同居の有無は、「あり」64人（26.9%）、「なし」172人（72.3%）であった。高齢者との接触の機会の程度は、「あり」89人（37.4%）、「あまりない」113人（47.5%）、「ない」35人（14.7%）であった。高齢社会への関心は、「あり」90人（37.8%）、「あまりない」124人（52.1%）、「ない」23人（9.7%）であった。

表3 祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心

項目	人数	%
祖父母との同居		
あり	64	26.90%
なし	172	72.30%
無回答	2	0.80%
高齢者との接触の機会の程度		
あり	89	37.40%
あまりない	113	47.50%
ない	35	14.70%
無回答	1	0.40%
高齢社会への関心		
あり	90	37.80%
あまりない	124	52.10%
ない	23	9.70%
無回答	1	0.40%

(3) 認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、認知症高齢者と接することの不安

認知症高齢者との接触の有無は、「あり」65人（27.3%）、「なし」166人（69.7%）であった。認知症高齢者への関心は、「とても関心がある」13人（5.5%）、「まあ関心がある」78人（32.8%）「どちらともいえない」66人（27.7%）、「あまりない」57人（23.9%）、「まったくな

い」11人（4.6%）、「わからない」10人（4.2%）であった。認知症高齢者と接することの不安は、「あり」71人（29.8%）「あまりない」67人（28.2%）、「なし」166人（69.7%）であった。

表 4 認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、認知症高齢者と接することの不安

項目	人数	%
認知症高齢者との接触		
あり	65	27.30%
なし	166	69.70%
無回答	7	2.90%
認知症高齢者への関心		
とても関心があり	13	5.50%
まあまあ関心がある	78	32.80%
どちらともいえない	66	27.70%
あまりない	57	23.90%
まったくない	11	4.60%
わからない	10	4.20%
無回答	3	1.30%
認知症高齢者と接することの不安		
あり	71	29.80%
あまりない	67	28.20%
なし	96	40.30%
無回答	4	1.70%

(4) 認知症高齢者のイメージ

1) 認知症高齢者のイメージ 形容詞対の平均値

中野らのSD法における老人イメージスケールを使つての認知症高齢者のイメージの構造をみた。17項目中、平均値が3点以上の肯定的評価がされたのは、「暖かいー冷たい」（ 3.06 ± 0.65 ）の1項目のみであった。一方、平均値の最も低かったのは、「速いー遅い」（ 2.48 ± 0.69 ）であった。「速いー遅い」以外の項目は2.5以上3.0未満であった。

表 5 認知症高齢者のイメージ 形容詞対の平均値

項目	平均	標準偏差
すばらしいーひどい	2.68	0.6
美しいー醜い	2.85	0.5
きれいなーきたない	2.92	0.51
賢いー愚かな	2.89	0.57
良いー悪い	2.95	0.66
きちんとしたーだらしない	2.89	0.56
正しいー正しくない	2.92	0.55
速いー遅い	2.48	0.69
鋭いー鈍い	2.51	0.7
忙しそうー暇そう	2.95	0.73
大きいー小さい	2.92	0.51
手伝ってくれるー邪魔する	2.76	0.62
話しやすいー話にくい	2.52	0.79
暖かいー冷たい	3.06	0.65
嬉しいー悲しい	2.64	0.71
元気なー病気がち	2.74	0.71
強いー弱い	2.68	0.71

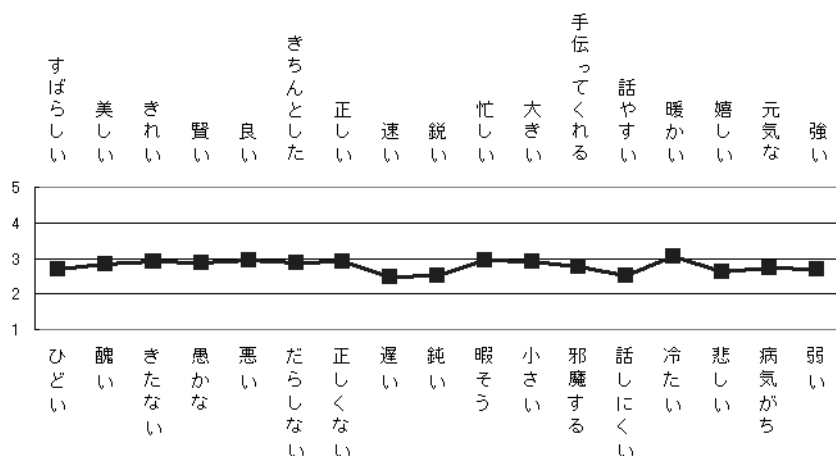


図1 認知症高齢者のイメージの構造(形容詞対の平均点)

2) 認知症高齢者のイメージの因子構造

形容詞対17項目の因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った結果、「強いー弱い」の項目の固有値が1以下であったため除外し、再度、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、4因子が抽出された。累積寄与率は60.99%であった。第一因子は「賢いー愚かな」「きれいなーきたない」「正しいー正しくない」「きちんとしているーだらしない」「良いー悪い」「暖かいー冷たい」「美しいー醜い」の7項目からなり、人間の品性や人間性にかかわる項目と解釈し、「尊厳性」と命名した。第二因子は「嬉しいー悲しい」「話しやすいー話にくい」「すばらしいーひどい」「元気なー病気がち」「手伝ってくれるー邪魔をする」は「親和性」とした。第三因子は「鋭いー鈍い」「遅いー速い」の項目からなり、「俊敏性」とした。第四因子は「いそがしいー暇そう」「大きいー小さい」の項目からなり、「日常性」とした。

また、クロンバッハの α 係数を算出したところ、第一因子0.841、第二因子0.773、第三因子0.793、第四因子0.473であり、一定の信頼性が得られた。

「尊厳性」(2.93 ± 0.41)、「親和性」(2.67 ± 0.50)、「俊敏性」(2.50 ± 0.63)、「日常性」(2.93 ± 0.52)であり、第一～第四因子のすべてが平均値3点以下の否定的評価がされた。

表 6 認知症高齢者の因子分析

	成分			
	第1因子 尊厳性	第2因子 親和性	第3因子 俊敏性	第4因子 日常性
賢いー愚かな	0.734	0.139	0.338	0.021
きれいーきたない	0.731	0.163	0.197	0.06
正しいー正しくない	0.721	0.064	0.001	0.356
きちんとしたーだらしない	0.686	0.094	0.223	0.262
良いー悪い	0.666	0.172	0.141	0.086
暖かいー冷たい	0.589	0.365	-0.114	-0.091
美しいー醜い	0.477	0.368	0.114	0.281
嬉しいー悲しい	0.055	0.804	-0.023	0.155
話しやすいー話にくい	0.324	0.652	0.296	-0.197
すばらしいーひどい	0.106	0.623	0.154	0.25
元気なー病気がち	0.222	0.606	0.246	0.195
手伝ってくれるー邪魔する	0.519	0.543	0.215	-0.068
鋭いー鈍い	0.18	0.16	0.843	0.138
速いー遅い	0.209	0.217	0.822	0.16
忙しそうー暇そう	0.077	0.212	0.143	0.806
大きいー小さい	0.447	0.073	0.174	0.544
因子負荷	6.096	1.419	1.219	1.024
累積因子負荷率	38.09	46.967	54.589	60.991
クロンバッハ α 係数	0.841	0.773	0.793	0.473

(5) 認知症イメージの4因子と祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心、認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、認知症高齢者になることの不安の関連

認知症高齢者のイメージの4因子と祖父母との同居、高齢者と接する機会、高齢者への関心、認知症高齢者との接触、認知症高齢者への関心、自分が認知症になることの不安の関連を検討するため、群間の平均値のt検定を行った。結果、認知症祖父母との同居と高齢者のイメージの第一因子「尊厳性」、第三因子「俊敏性」、自分が認知症になることの不安と第三因子「俊敏性」、第四因子「日常性」に差がみとめられた。

表 7 認知症高齢者のイメージの4因子と祖父母との同居のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤 差	差の 95% 信頼区間 下限	上限
第一因子 等分散を仮定する。 尊厳性 等分散を仮定しない。	5.768	.017	-2.700	233	.007	-.15903	.05889	-.27506	-.04300
			-2.523	99.981	.013	-.15903	.06303	-.28408	-.03398
第二因子 等分散を仮定する。 親和性 等分散を仮定しない。	.714	.399	-1.138	233	.256	-.08381	.07367	-.22895	.06134
			-1.078	102.465	.283	-.08381	.07773	-.23797	.07035
第三因子 等分散を仮定する。 俊敏性 等分散を仮定しない。	.571	.451	-2.403	233	.017	-.21765	.09059	-.39613	-.03918
			-2.507	123.364	.013	-.21765	.08681	-.38948	-.04583
第四因子 等分散を仮定する。 日常性 等分散を仮定しない。	1.276	.260	-1.248	233	.213	-.09284	.07441	-.23943	.05376
			-1.207	106.329	.230	-.09284	.07689	-.24527	.05939

表 8 認知症高齢者のイメージの4因子と高齢者と接する機会のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
第一因子 等分散を仮定する。	.078	.780	.136	200	.892	.00804	.05904	-.10839	.12447
尊厳性 等分散を仮定しない。			.140	199.967	.889	.00804	.05732	-.10499	.12108
第二因子 等分散を仮定する。	.195	.669	.224	200	.823	.01670	.07444	-.13008	.16349
親和性 等分散を仮定しない。			.224	186.140	.823	.01670	.07473	-.13072	.16413
第三因子 等分散を仮定する。	.002	.962	-1.063	200	.289	-.09600	.09035	-.27417	.08216
俊敏性 等分散を仮定しない。			-1.064	190.207	.289	-.09600	.09021	-.27393	.08193
第四因子 等分散を仮定する。	.303	.583	1.518	200	.130	.10858	.07151	-.03243	.24959
日常性 等分散を仮定しない。			1.514	187.009	.132	.10858	.07171	-.03288	.25004

表 9 認知症高齢者のイメージの4因子と高齢者への関心のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
第一因子 等分散を仮定する。	2.866	.092	1.018	213	.310	.05831	.05729	-.05462	.17124
尊厳性 等分散を仮定しない。			1.084	211.855	.280	.05831	.05379	-.04773	.16495
第二因子 等分散を仮定する。	.084	.773	.940	213	.348	.06542	.06959	-.07175	.20259
親和性 等分散を仮定しない。			.935	188.268	.351	.06542	.06995	-.07256	.20340
第三因子 等分散を仮定する。	3.105	.079	.731	213	.466	.06222	.08512	-.10557	.23001
俊敏性 等分散を仮定しない。			.753	208.258	.453	.06222	.08268	-.10078	.22522
第四因子 等分散を仮定する。	.801	.372	1.616	213	.108	.11356	.07027	-.02498	.25208
日常性 等分散を仮定しない。			1.623	195.013	.106	.11356	.06995	-.02440	.25151

表10 認知症高齢者のイメージの4因子と認知症高齢者との接触のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
第一因子 等分散を仮定する。	.196	.659	1.597	229	.112	.09652	.06042	-.02253	.21558
尊厳性 等分散を仮定しない。			1.529	107.975	.129	.09652	.06312	-.02859	.22164
第二因子 等分散を仮定する。	.497	.509	.914	229	.362	.06806	.07448	-.07868	.21481
親和性 等分散を仮定しない。			.861	104.937	.391	.06806	.07901	-.08862	.22474
第三因子 等分散を仮定する。	1.075	.301	.962	229	.337	.08865	.09218	-.09297	.27027
俊敏性 等分散を仮定しない。			.975	120.416	.331	.08865	.09090	-.09132	.26862
第四因子 等分散を仮定する。	.510	.476	.554	229	.580	.04152	.07494	-.10614	.18918
日常性 等分散を仮定しない。			.558	118.531	.578	.04152	.07446	-.10593	.18897

表11 認知症高齢者のイメージの4因子と認知症高齢者への関心のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
第一因子 等分散を仮定する。	.549	.460	1.181	231	.239	.06597	.05587	-.04411	.17605
尊厳性 等分散を仮定しない。			1.232	214.047	.219	.06597	.05356	-.03960	.17154
第二因子 等分散を仮定する。	.164	.685	.042	231	.966	.00291	.06844	-.13194	.13775
親和性 等分散を仮定しない。			.042	187.289	.966	.00291	.06866	-.13254	.13835
第三因子 等分散を仮定する。	.049	.825	-.642	231	.522	-.05493	.08563	-.22365	.11378
俊敏性 等分散を仮定しない。			-.649	196.446	.517	-.05493	.08464	-.22186	.11199
第四因子 等分散を仮定する。	3.773	.053	1.868	231	.063	.12855	.06882	-.00704	.26415
日常性 等分散を仮定しない。			1.907	202.038	.058	.12855	.06740	-.00435	.26146

表12 認知症高齢者のイメージの4因子と自分が認知症になることの不安のt検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤 差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
第一因子 等分散を仮定する。	.869	.352	1.673	228	.096	.09748	.05826	-.01730	.21227
尊厳性 等分散を仮定しない。			1.733	147.739	.084	.09748	.05605	-.01328	.20825
第二因子 等分散を仮定する。	.051	.822	1.003	228	.317	.07273	.07249	-.07011	.21556
親和性 等分散を仮定しない。			.967	123.688	.335	.07273	.07520	-.07612	.22157
第三因子 等分散を仮定する。	.205	.651	3.051	228	.003	.27115	.08887	.09603	.44626
俊敏性 等分散を仮定しない。			2.934	123.022	.004	.27115	.09242	.08821	.45408
第四因子 等分散を仮定する。	2.060	.153	2.340	228	.020	.16640	.07112	.02627	.30653
日常性 等分散を仮定しない。			2.422	146.403	.017	.16640	.06889	.03065	.30215

(6) 自由記述「認知症高齢者に接した場合の対応」についてテキストマイニング分析

認知症高齢者に接した場合の対応の自由記述を頻度分析で単語頻度解析、話題分析で、祖父母の同居の有無と認知症高齢者との接触の有無の属性別に、言葉のつながりをみた。

単語頻度解析では頻度が5つ以上の単語は20単語あった。「接する」「接」「接す」は同義語とみなすと、18単語となった。

話題分析では言葉の繋がりネットワークの広がり、祖父母の同居していない者と認知症高齢者との接触のない者の方があった。

表13 自由記述「認知症高齢者に接した場合の対応」の単語頻度

単語	品詞	頻度
人	名詞	21
優しい	形容詞	19
接する	動詞	16
接	名詞	15
普通	名詞	15
聞く	動詞	14
対応	名詞	13
認知症	名詞	13
話	名詞	13
わかる+ない	動詞	9
話しかける	動詞	8
いる	動詞	7
気	名詞	7
接す	動詞	7
言う	動詞	6
自分	名詞	6
する+したい	動詞	5
何回	名詞	5
説明	名詞	5
答える	動詞	5

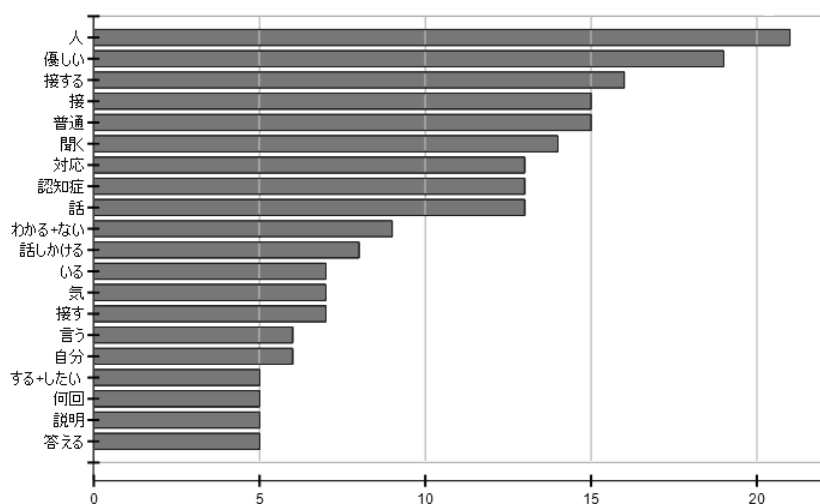


図2 自由記述「認知症高齢者に接した場合の対応」の頻出語

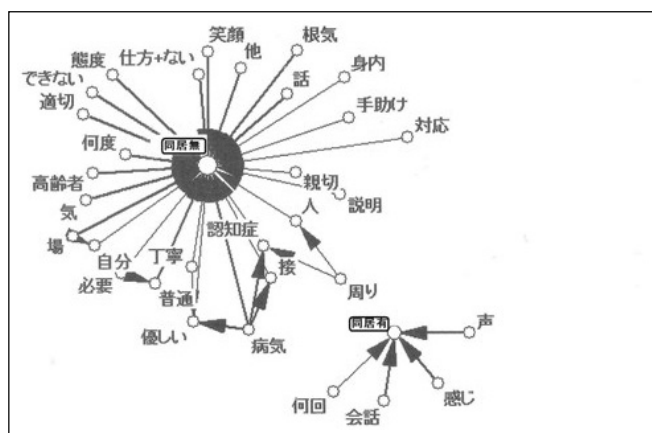


図3 祖父母との同居の有無と話題分析

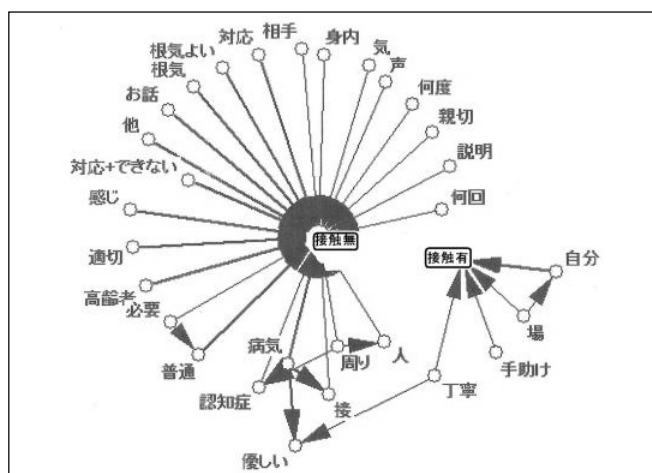


図4 祖父母との同居の有無と話題分析

5. 考察

大学生の抱く認知症高齢者のイメージは17形容詞対のうち、平均値が3点以上の肯定的評価がされたのは、「暖かいー冷たい」(3.06 ± 0.65)の1項目のみであった。

他の16項目は否定的評価が示された。最も否定的要素として、「速いー遅い」(2.48 ± 0.69)であった。桂らの看護学生を対象とした認知症高齢者のイメージ、吉川らの介護学生、介護職員を対象とした調査と同様に、認知症高齢者は否定的評価が多い傾向となった。また、両研究においても、「暖かいー冷たい」は、肯定的評価であった^{7) 8)}。

本研究で、認知症高齢者のイメージの因子分析の結果導き出された4因子、「尊厳性」「親和性」「俊敏性」「日常性」の平均も3点以下で、否定的評価となった。桂らの研究と同様の結果が得られた。

本研究での「尊厳性」は「賢いー愚かな」「きれいーきたない」「正しいー正しくない」「きちんとしているーだらしない」「良いー悪い」「暖かいー冷たい」「美しいー醜い」の7項目となった。桂らの調査の「尊厳性」では「すばらしいーひどい」が含まれていた。「親和性」は「嬉しいー悲しい」「話しやすいー話しにくい」「すばらしいーひどい」「元気なー病気がち」「手伝ってくれるー邪魔をする」とした。桂らの調査の「すばらしいーひどい」はここに含まれた⁹⁾。吉川らの認知症高齢者のイメージの因子分析では、「親和性」「力動性」があった。吉川らの「親和性」の因子には、「愛想のよい」「やさしさ」「好きな」「上品な」「暖かい」「慣れた」「明るい」があった¹⁰⁾。

先行研究の大学生の高齢者のイメージでは、保坂らは「有能性」「活動・自立性」「幸福性」「協調性」「温和性」「有能性」の6因子で、「温和性」「有能性」は肯定的評価で、「活動・自立性」は最も、否定的評価であった¹¹⁾。大学生は高齢者の情緒面に関することは肯定的に評価する傾向にあり、高齢者の身体に関することは否定的に評価する傾向がある¹²⁾。本調査は認知症高齢者のイメージであったため、高齢者のイメージに学生が考える認知症や認知症の症状に対する認識が加わって、情緒面、身体面も否定的評価になったと考えられた。

木村らが地域住民を対象に「認知症と聞いてイメージすること」を自由記述にて調査した。物忘れ、記憶障害といった中核症状、脳委縮、アルツハイマー、老化といった病気・病態、徘徊、人格破壊、抑うつなどの周辺症状が主な内容であった¹³⁾。大学生も、認知症の症状などから、認知症高齢者をイメージしていることがうかがわれた。

大学生の抱く認知症高齢者のイメージとの関連要因として、祖父母との同居の有無、自分が将来、認知症になることの不安があがった。祖父母と同居している者の方が、認知症高齢者のイメージが否定的評価傾向になっていた。祖父母と同居していることで、高齢者のことがわかり、そのイメージに認知症の症状などの知識を加えて、否定的傾向になっている可能性が考えられる。また、祖父母との同居のない大学生は高齢者についてよくわからないため、認知症高齢者についても現実的なイメージができなく肯定的な傾向になった可能性が考えられる。認知症高齢者との接触の有無と認知症高齢者のイメージには差が認められなかった。桂ら、吉川らの調査のように

看護学生が学年のあがるにつれて、知識が実習などを通して深化すること、介護経験を積むことで、認知症のイメージが肯定的評価に変化したとある。今回の調査対象の学生は医療・福祉について専門的に学んでいる学生ではない、そのため、高齢者、認知症高齢者に対する関心が薄いことが伺われ、このような結果になったと考えられる。

次に認知症高齢者と接した場合の対応の自由記述から、祖父母と同居している者、認知症高齢者と接触のある者は認知症高齢者にあわせて関わろうとする姿勢が伺えた。祖父母と同居していない者、認知症高齢者と接触のない者の中には、関わりを持たないという者もいた。また、対応方法についてもさまざまな意見があることがわかった。認知症高齢者がわからないため、このようになったとも考えられる。木村らが、地域住民を対象におこなった調査で、認知症高齢者が身近にいた場合の対応の内容分析の結果、「なんらかの関わりをもとうとする」130（64.7%）、「関わらない」71（35.3%）であった¹⁴⁾。本研究では自由記述の結果から、多くの学生は「何らかの関わりをもとうとする、関わりたい」ということがわかった。大村らの調査で、高齢者に対する理想像と現実のイメージの隔たりが大きいほど、また、親和性に対してのイメージが低いほど、虐待につながりやすいとある¹⁵⁾。大学生に認知症高齢者を現実的な理解を促す関わりが必要となってくる。

今後、授業での取り組みとして、認知症の病気の理解だけではなく、認知症高齢者への対応の仕方、認知症高齢者へのサポートのあり方、地域での暮らし方について知識の普及が必要であることが示唆された

6. おわりに

認知症高齢者のイメージの因子分析の結果導き出された4因子、「尊厳性」「親和性」「俊敏性」「日常性」の平均は3点以下で、否定的評価となった。関連要因として、祖父母との同居の有無、自分が将来認知症になることの不安があがり、祖父母と同居している者の方が、認知症高齢者のイメージが否定的評価傾向になっていた。認知症高齢者と接した場合の対応の自由記述から多くの学生は何らかの関わりをもとうとする、関わりたいということがわかった。大学生に認知症高齢者を現実的な理解を促す関わりが必要となり、認知症の病気の理解、認知症高齢者への対応の仕方、認知症高齢者へのサポートのあり方、地域での暮らし方について知識の普及が必要であることが示唆された。

引用参考文献

- 1) 保坂久美子、袖井孝子（1988）：大学生の老人イメージ、SD法による分析、社会老年学27、22-33
- 2) 大村壮（2010）：特別養護老人ホーム職員の高齢者イメージのズレが施設内老人虐待に与える影響、心理学研究81(4)、406-412
- 3) 桂晶子、佐藤このみ（2008）：看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ、宮城大学看護学紀要11(1)、49-56

- 4) 吉川悠貴、後藤満枝、佐藤佳子、後藤美恵子、加藤伸司、安部哲也：認知症高齢者イメージの構造と介護経験によるイメージの差、
www.dcnet.gr.jp/kaigokenkyu/pdf/sendai_h17/s_nenpou6_05.pdf
- 5) 木村典子（2008）：一般住民の身近に認知症高齢者がいた場合の対応に関する意識、認知症についての知識・不安との関係、愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要43、89-94
- 6) 中野いく子（1990）：児童の老人イメージ、SD法による測定と要因分析、社会老年学、34、11-22
- 7) 3) 前掲
- 8) 4) 前掲
- 9) 3) 前掲
- 10) 4) 前掲
- 11) 1) 前掲
- 12) 伊藤豊美、住垣千恵子、後藤友美、岩崎孝子、林稚佳子（2010）：老年看護学実習における看護学生の高齢者のイメージの変化、国立看護大学校研究紀要9(1)、37-42
- 13) 5) 前掲
- 14) 5) 前掲
- 15) 2) 前掲

受理日 平成25年 3 月25日